

福井・敦賀・洲本三市方言の動向

——大阪弁の広がり——

鎌 田 良 二

全国共通語化が進むにつれて、大阪方言がどのような衰退を示すか、あるいは依然その勢力を保って周辺部に進出しているのかを見るため、北の福井市・敦賀市と南の洲本市における状況を試みた。

京阪語は古くから北東と、南西への広がりを見せている。たとえば、アクセントにしても京阪型は能登半島へ延び、また、香川・徳島へ延びている。北西に当る兵庫県の北半、但馬は鳥取と同じ乙種式（東京型）である。

このようなことから今回は大阪弁の広がりを見るのに上記三市を選んだ。
調査内容として、場面調査・語彙調査・語法調査とした。

調査に当っては、成人層五十五才以上六十五才までの男女各一名（敦賀市では二十才代の女性一名を含む）。中学三年生一クラス男女合せて約四十名。成人、中学生ともその土地生えぬぎの人を条件とした。

場面調査

場面差に関する項目として設定したのは次の三項である。

「いくら（値段）」「捨てる」「（雨が）降っているから」

場面設定は次の三場面である。「いくら（値段）」のみ（ ）内の内容で設定した。

- (1) ふつう(近所の店で)
 (2) 大阪の人に対して(大阪の店で)
 (3) 東京の人に対して(東京の店で)
 質問文「いくら(値段)」の場合、

〈近所の店で物の値段をたずねるとき、「いくら」と聞きますか、「なんぼ」と聞きますか〉(大阪の店で……)〈東京の店で……〉

以下の(表)の百パーセントで示したのは中学生。その棒の上に○印をつけた部分の項が成人の答えである。中学生男の「いくら」の部分に○印があれば、成人男が「いくら」ということである。敦賀の▽印は若い女性を示す。

「いくら(値段)」

福井・敦賀は男女ともイクラが一般である(以下、「一般」とはその土地で広く使われている形をいう)が、福井で「大阪の店で」にナンボが現れる。それが、敦賀ではさらに「大阪」の方でナンボが急増する。敦賀の女子中学生はふだんイクラと言っているが、大阪へ行けばナンボとたずねるのである。これはナンボを大阪弁と考えているからであろう。敦賀の男子で「東京」にナンボがあるのは「近所」でナンボとなっているのがそのまま「東京」でも残ったもので「大阪」は当然という形となったものである。

これに対して洲本はナンボが一般だから、「大阪」では急減する。特に女子は著しい。ナンボは自分たちの土地のことだから「大阪」では使わない、大阪弁とは思っていない。

(表 1)

福井	男	近 所	イクラ ○	100		
		大阪で	○	94		ナンボ 6
		東京で	○	100		
女	近 所	近 所		100		
		大阪で		95		5
		東京で		100		
敦賀	男	近 所	イクラ ○	92		ナンボ ナンエン 4 4
		大阪で	○	74		ナンボ 26
		東京で	○	96		ナンボ 4
	女	近 所	▽	95		ナンボ ○ 5
		大阪で	▽ ○	74		26
		東京で	▽ ○	100		
洲本	男	近 所	イクラ ○	12		ナンボ 88
		大阪で	○	53		ナンエン 35 12
		東京で	○	59		35 6
	女	近 所	イクラ ○	18		82
		大阪で	○	94		ナンボ 6
		東京で	○	100		

「捨てる」

〈いらなくなった物をごみ箱に「捨てる」ことをふつうどのように言いますか〉〈大阪の人に対して……〉〈東京の人に対して……〉

福井は男女ともステルが一般である。「ふつう」でもホカスは出ないのに、「大阪の人に対して」になると男女とも僅かではあるが現れる。

敦賀になると「ふつう」でステル・ホカスが半々。女子はホカスが多い。僅かであるが「大阪」では「ふつう」よりもホカスが多く、「東京」では「ふつう」よりもステルが多くホカスが少くなっているということは、ホカスは大阪弁とされていることによるのであろう。

福井よりも敦賀が地理的に大阪に近いため大阪弁のホカスが多くなるのは当然ながら、意識的にもホカスは「大阪」と思うことが福井よりも強いのであろう。

洲本はホルが一般的。そのホルが「大阪」「東京」へと減っていく。しかし、ホルは「放る」だから俚言意識も薄くかなり残るものであろう。

「(雨が)降っているから」

〈(雨が)降っているから、行くのはやめろ〉というとき、「降っているから」のところをふつうどのように言いますか〉〈大阪の人に対して……〉〈東京の人に対して……〉

本稿は先に「近畿、中国境界地帯の方言動向」(『甲南女子大学研究紀要第二十五号』平成元年三月)として発表したものと関連したものである。

前回のものは兵庫——岡山・兵庫——鳥取の線で成人男女・中学生男女各一名ずつのものであった。

(表 2)

福井	男	ふつう	ステル ○	ホル	95	5	
		大阪で	○	ホル	90	5	5
		東京で	○		100		
女	女	ふつう	○	ナゲル	90	10	
		大阪で	○	ホル	85	5	5
		東京で	○	ホカス	100		
敦賀	男	ふつう	ステル	ホカス ○ ▽	52	48	
		大阪で	▽	○	48	52	
		東京で	○ ▽		65	35	
	女	ふつう			38	62	
		大阪で			33	67	
		東京で			62	38	
洲本	男	ふつう	ステル	ホル ○	6	88	6
		大阪で	○		53	41	6
		東京で	○		63	37	
	女	ふつう		ホル ○	95	5	
		大阪で	ステル ○	ホル	53	47	
		東京で	○		65	35	

項目は大体今回のものと似たもので、特に「場面差」の項目は同じである。前回のものを参考に見て頂きたい。この「(雨が)降っているから」の項では前回に次のように分けた。

- ① フッテイルカラ、フッテイルノデ、フッテルカラ ② フットルカラ ③ フットルデ ④ フットルシケ
 ⑤ フットルケー ⑥ フリヨルカラ ⑦ フリヨールカラ ⑧ フリヨールケ ⑨ フッテイルケ、フッ
 ルケ

これは共通語色の多いものから順に地方色の多いものへとならべたつもりである。これにさらに次の四種をつけ加えることにする。

- ⑩ フットルシ ⑪ フットルサカイ ⑫ フットルサケ ⑬ フットルカサラ

福井はもともと①が半数からそれ以上である。③は理由助詞カラがデになるもの、そのデは「東京」に近くなる
 と減っていく「東京」では八十パーセント以上が①になる。

敦賀は「ている」がトルとなる。⑩は理由助詞がカラでなくシとなるものだが、これには少し意味のずれがある
 かもしれない。⑪⑫はサカイ、サケとなるのであるか、⑬はカサラが現れる。この敦賀の若い女性(成人)は「大
 阪」「東京」では①になっている。若い女性は共通語化がはやいのが一般的である。

洲本にはこの場合サカイ系が出ていない。しかし、洲本市にサカイ系が一般にないのではない。「ている」のヨ
 ルが僅かながら出ている。全体としてはトルになっている。ヨル、トルの意味性は神戸などと同じだが、ヨルでは
 本人の記したままの形で記しておいた。

全体として敦賀と洲本は②が一般となっていることが言える。

敦賀の⑪⑫のサカイ、サケは「大阪」では少し残るものの「東京」ではさらに少なく、特に女子では全くなくな
 る。

(表 3) 「(雨が) 降っているから」

福井	男	ふつう	① 70	③○ 30			
		大阪で	○ 77	23			
		東京で	○ 82	18			
女	女	ふつう	① ○ 47	③ 53			
		大阪で	○ 63	37			
		東京で	○ 84	16			
敦賀	男	ふつう	① 5	② 62	⑩ 10	⑪ 5	⑫ 18
		大阪で	17	58	⑩ 8	⑪ 4	⑫ 13
		東京で	26	61	⑩ 4	⑫ 9	
女	女	ふつう	① 15	② ○ ▽ 70	⑫ ⑬ 5 5		
		大阪で	▽ 10	○ 85	⑫ 5		
		東京で	▽ 37	○ 61			
洲本	男	ふつう	① 6	② ○ 88	⑥ 6		
		大阪で	○ 49	51			
		東京で	○ 59	41			
女	女	ふつう	② ○ 100				
		大阪で	① ○ 59	41			
		東京で	○ 59	41			

語彙調査

へあなたが、ふだんお使いになっていることばについてお聞きします。次のようなことばをお使いになるのかどうか、次の三つの中から選んで下さい。

- 1 使う 2 (自分は使わないが聞いたことはある) 聞く 3 使わない (聞いたこともない)

ここにあげた語は一般に大阪語とみられているもので、前田勇著『大阪弁の研究』に出ているものである。オジヤミ(お手玉)・ハンナリシタ(しっとりし上品ではなやかなようす)は榎垣実『京言葉』から補ったもので、(手袋を)ハク(はめる)・(手袋を)サス(はめる)・(傘を)キル(さす)・ニナウ(てんびん棒でかつぐ)・ニナウ(同)・イナウ(同)・キバル(がんばる)・カントダキ(煮込みおでん)・ナンバ(とうもろこし)・チリメンジャコ(しらす)・サンパツヤ(床屋)・キツイ(きびしい)は本稿で補ったものである。

結果から見て次の三群に分ける。

A群は三市ともに「使う」が多いもの。

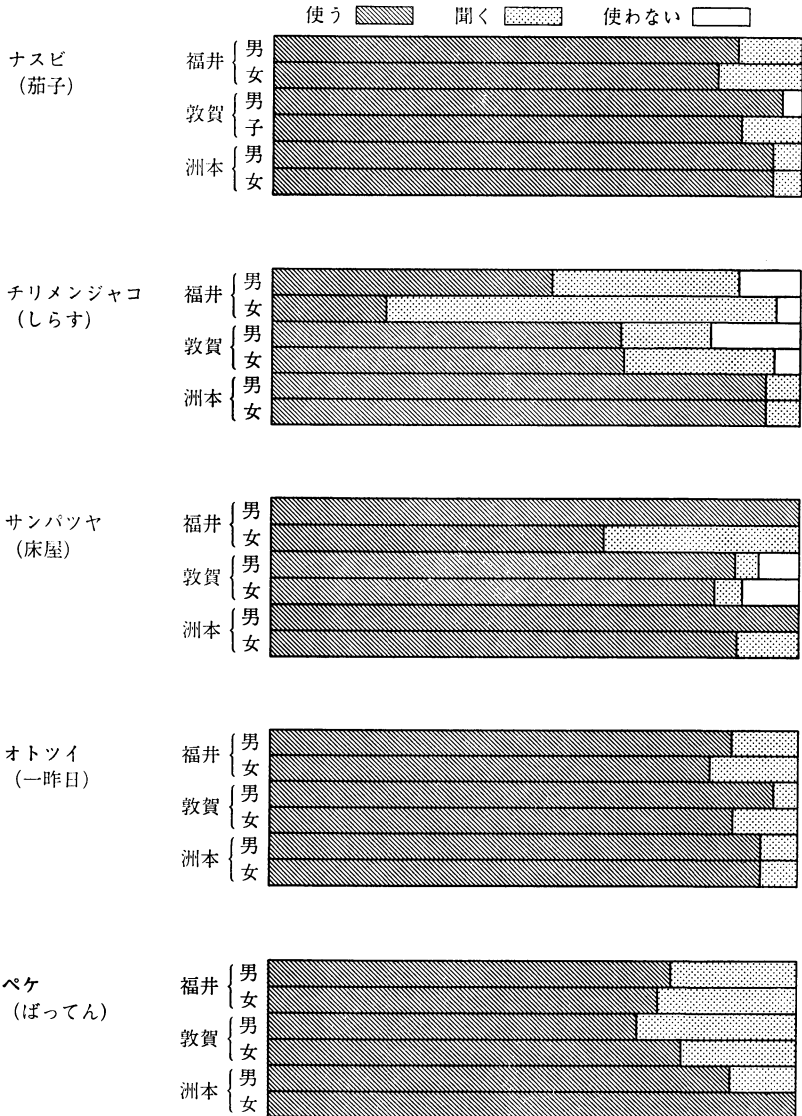
名詞六語、動詞五語、形容詞三語の計十四語であるが、ナスビ(茄子)・チリメンジャコ(しらす)・サンパツヤ(床屋)・オトツイ(一昨日)・ハク(手袋をはめる)・タク(煮る)・ヌクメル(暖める)などの日常生活に直結するものである。

大阪語の進出、広がりを示すものと言えよう。

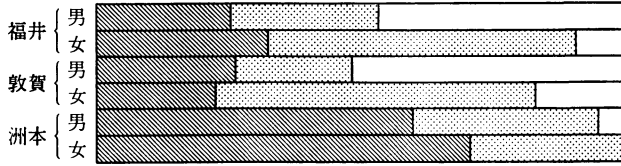
B群は三市に片寄りのあるもの。というより洲本市のみに「使う」が多いもの。これは他の三市よりも地理的に近いということからくるものとも考えられる。

メバチコ(ものもらい)などは全国的に俚言形の多いものであり、ケッタクソワルイ(いまいまい)などあま

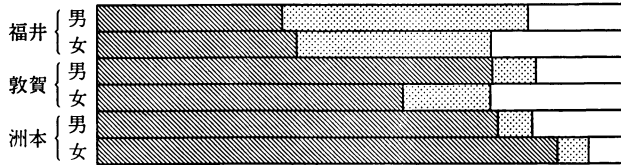
(表4-A)



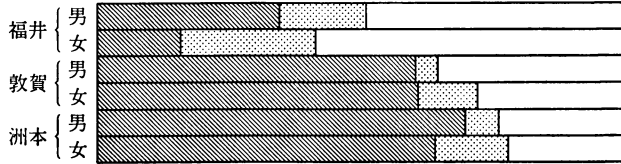
ナキミン
(泣虫)



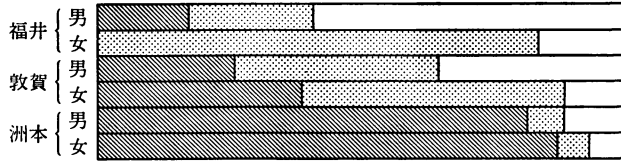
タウク
(煮る)



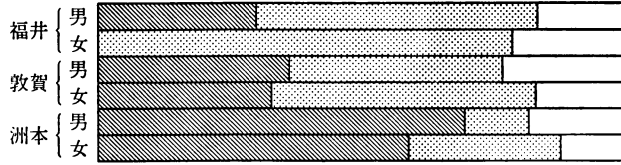
ナオス
(かたづける)

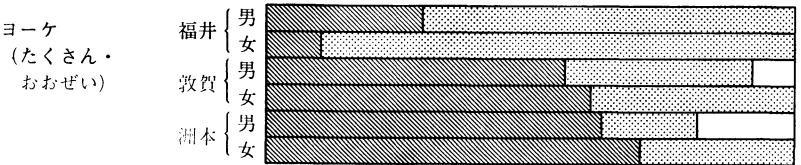
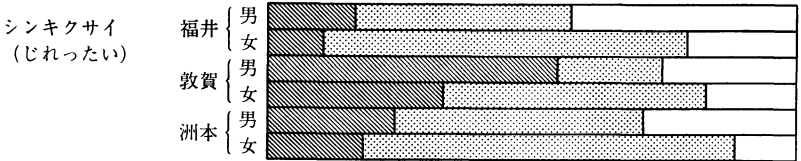
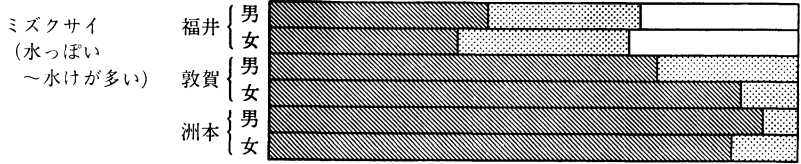
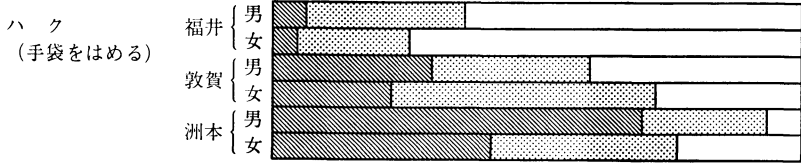


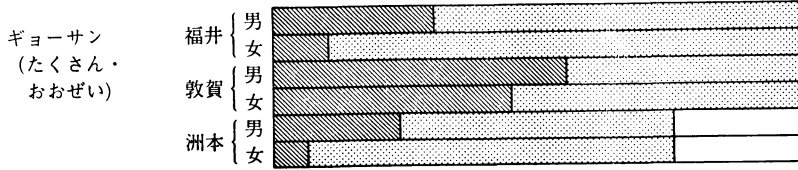
ヌクメル
(あたためる)



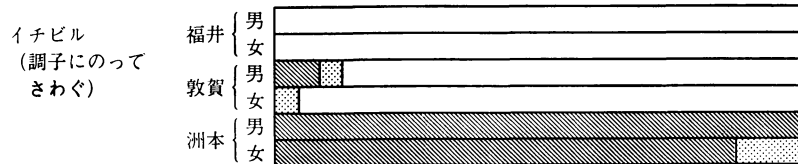
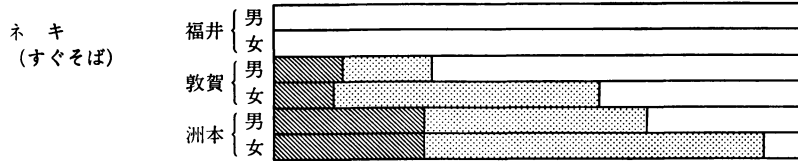
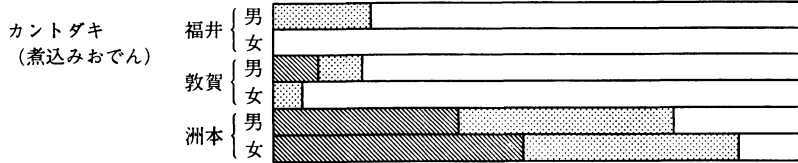
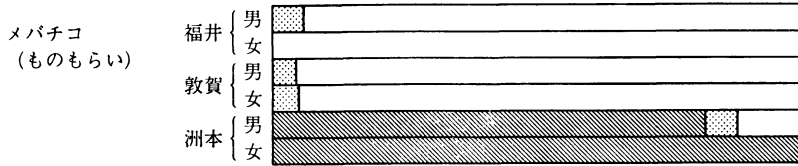
キバル
(がんばる)

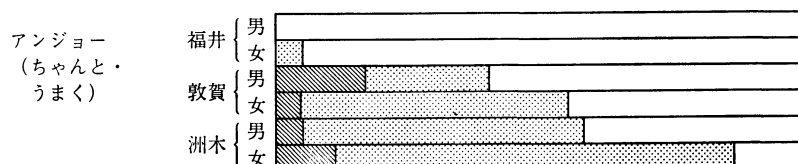
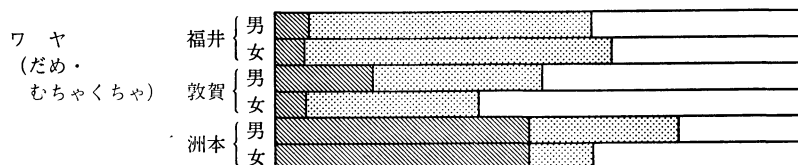
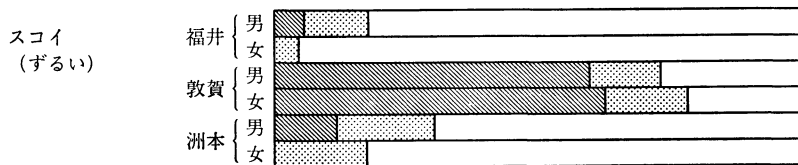
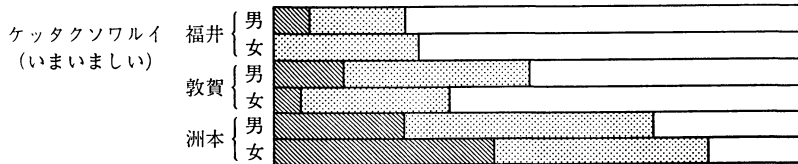
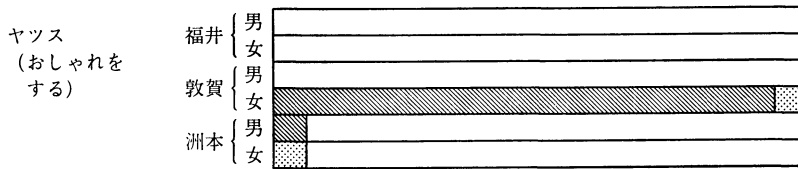




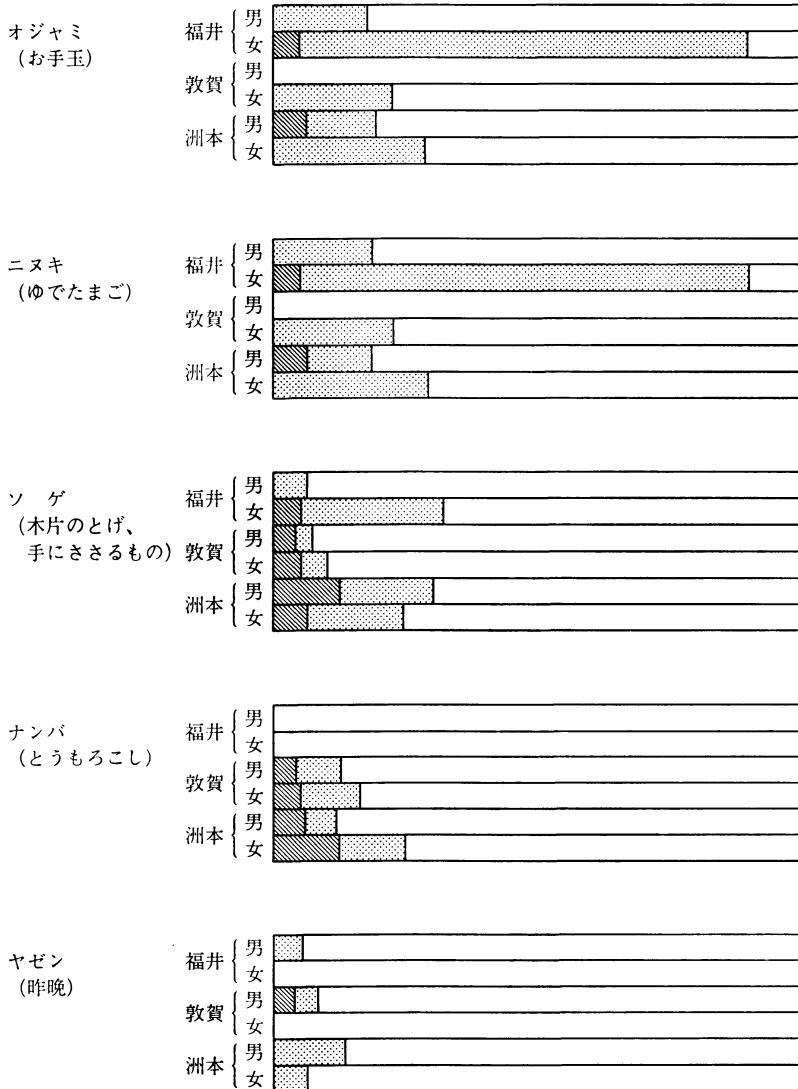


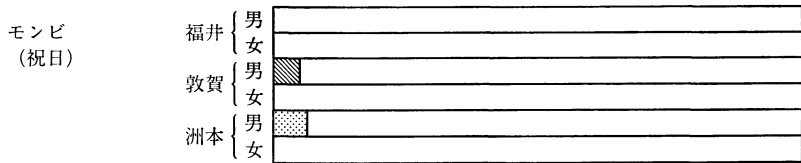
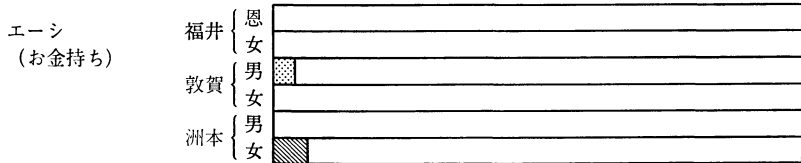
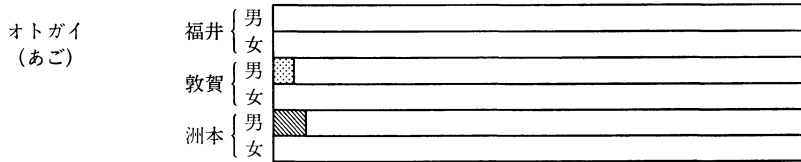
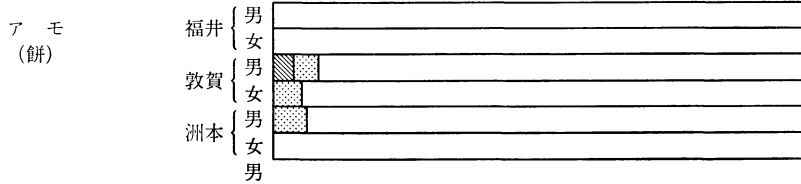
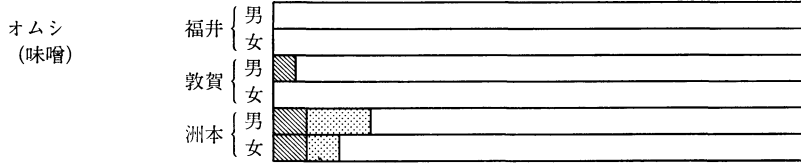
(表 4-B)

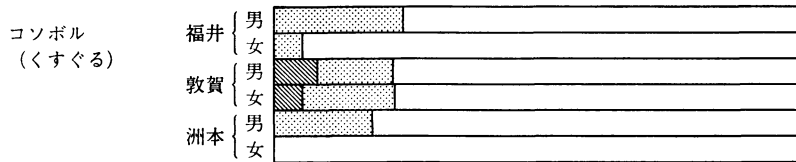
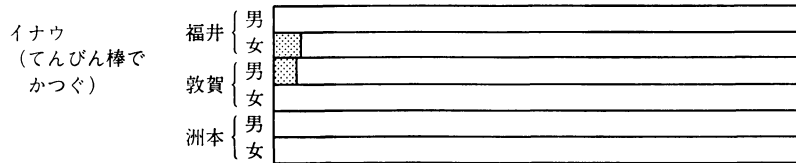
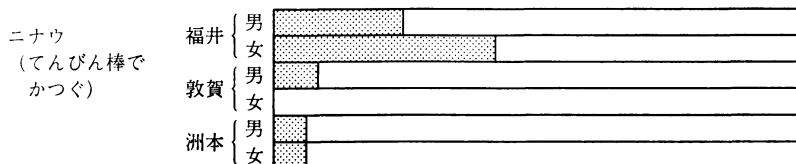
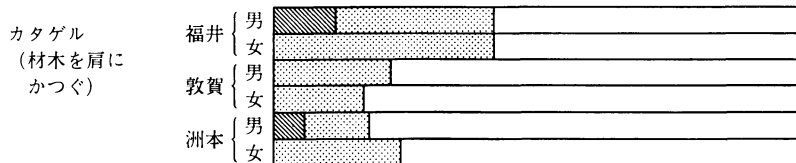
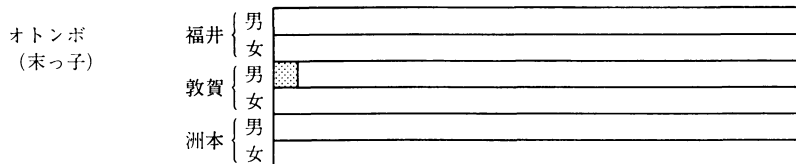




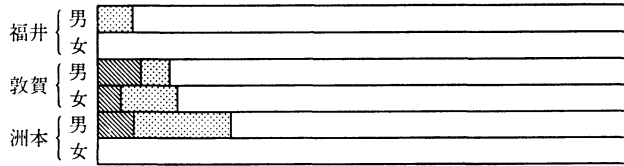
(表 4-C)



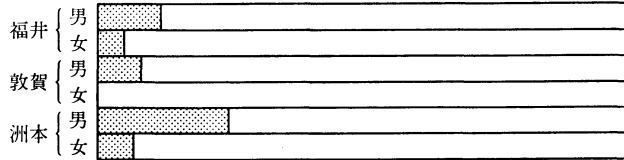




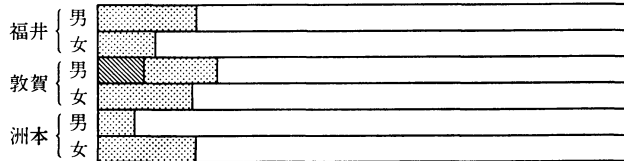
キ ル
(傘をさす)



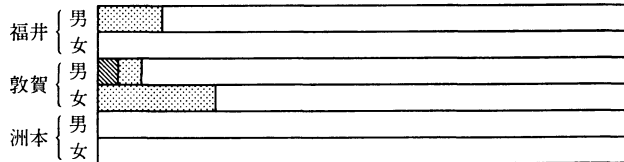
ツズクル
(衣服などを、
修繕する)



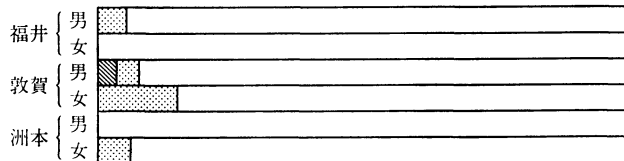
ダイジナイ
(さしつかえない)

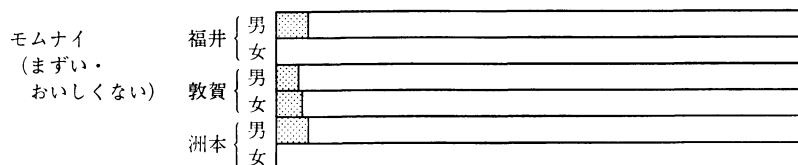
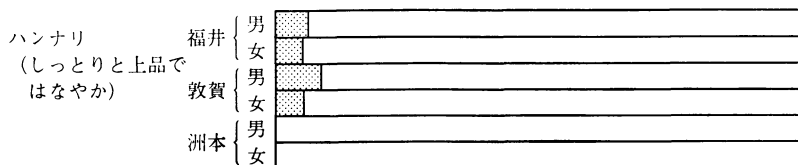
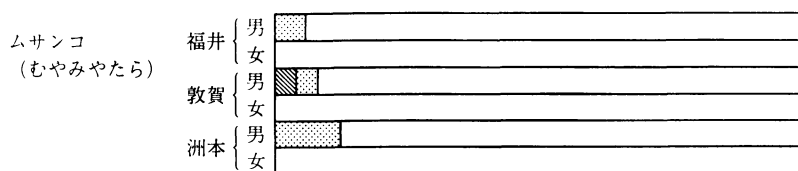


ダンナイ
(さしつかえない)



ズツナイ
(切ない、
つらい、
苦しい)





りにも大阪の特殊性のあるもの、また、カントダキ(煮込みおでん)のように、おかずをニル(煮る)という地域にはなくタク(炊く)という地域でなければ生まれにくい形のもの。

ヤツス(おしゃれをする)・スコイ(ずるい)は敦賀のみに多く、ヤツスは女子に限るものがある。敦賀は京都に近いのでこれは京都語として生きているものかと思う。

ネキ(そば)福井は全く「使わない」が、敦賀はかなりある。特に女子は知っている。洲本は殆どの者が知っている。二地点とも女子の方が多い。福井まではこの語は届いていない。京都型というより大阪型の語といえようか。

ここにあげた限り名詞よりも動詞の方に「使う」率が高いようだ。

C群は三市とも「使わない」が多いもの。大阪弁の衰退を示すものである。三市の中学生にとって知らないことばである。ただオジャミ(お手玉)・ニヌキ(ゆで卵)の二つは福井の女子に「聞く」が多い。少くとも親の代までは使っていたのだろう。

ソゲ(木片のとげ、手にささるもの)・ナンバ(とうもろこし)以下の各語は大阪から最も遠い福井では殆んどない。大阪の俚言性の強いものである。

文法調査

三市を中心とした見方をする。

ここにあげた(表5)は阪神間から岡山県・但馬から鳥取への線をも記したがそれと三市との関係を見ていく。

(表5)の甲南女子大学三年生阪神間在住者の「阪神間」とは兵庫県の大坂府に近い尼崎市・川西市・宝塚市・伊丹市・三田市・芦屋市と川辺郡である。この辺りの人口はほぼ神戸市と同じ位で百四十万人ほどになる。

甲南女子中学は神戸市在住者である。御影中学は神戸市の東部の東灘区にある市立中学で以下の各中学は公立で学区制である。

「福浦」は赤穂福浦地区で昭和三十六年まで岡山県であったが、同年以降兵庫県赤穂市に編入されたところ。この中学生は赤穂中学に通学している。「日生」^{ひなま}「備前」は岡山県である。「竜野」「相生」はJ R 山陽本線。「相生」から「備前」まではJ R 播州赤穂線である。阪神間から備前までを以下「赤穂線」という。一方、「和田山」から「鳥取」までを以下「但馬線」とよぶことにする。これはJ R 山陰本線であるが、「出石」はJ R 線は通っていない。豊岡市から東の京都府寄りにバスで三十分程の出石郡出石町である。

(表5)の甲南女子中学の斜線左上は「阪神間」、右下は「神戸」、甲南女子大学はすべて「阪神間」。以下、福浦を除く各地点の斜線左上は中学生男子、右下は中学生女子の使用率。各中学ともクラス約四十名、男子二十名、女子二十名位。各地点生えぬきの者。ほかに各地点とも成人男女一名ずつを調査した。それは斜線右上端男性、女性左下端に黒三角印で使用を示した。豊岡・鳥取の左下端に二本線を記したのは同市の若い女性の使用を意味する。

中学生の使用率は次の通りである。

- 八十パーセント以上使用
- ▼ 六十パーセント～七十九パーセント
- + 四十パーセント～五十九パーセント
- 二十パーセント～三十九パーセント
- 十パーセント～十九パーセント
- ・ 九パーセント以下

	甲子南 甲	甲子南 大	御影	竜野	相生	赤穂	福清	日生	備前	洲本	和山	養父	八鹿	日高	豊岡	城崎	出石	竹野	香住	浜坂	岩美	鳥取	敦賀	福井
1 昔かない																								
カカヘン	●+	+	▲	▲	■	■	▲	▲	▲	+	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カケヘン	○	+	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カカソ	●		●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カカヒソ																								
カキヒソ																								
カカセソ																								
カカナイ	+																							
2 蒼ない																								
キーヘン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
キーヒソ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キヤヘン																								
キレヘン																								
キラ...																								
キン																								
キナイ	+	●	●	●	●	●	●	●	●	+	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
3 葉ない																								
キーヘン	●	○	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クラヘン																								
ケヘン		+																						
コーヘン	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
コン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コナイ	+	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(表5)

9 書かせる	甲女 南中	甲女 南大	御 影	竜 野	相 生	赤 穂	福 浦	日 生	備 前	洲 本	和 山	養 父	八 鹿	日 高	豊 岡	城 崎	出 石	竹 野	香 住	浜 坂	岩 美	鳥 取	敦 賀	福 井
カカス	+	+	▲	▲	+	+	+	+	+	+	▲	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
カカサス	•		○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
カカサセル			○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
カカセル	+	+	○	○	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
10 来れば			○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
キタラ	+	▲	▲	▲	+	+	+	+	+	+	▲	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
クリヤ(-)		•	○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
クルト			•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
クラ																								
クレバ	+	•	○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
11 指定助動詞																								
ダ	•	•	○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
ジャ			○	○	•	•	•	•	•	○	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
ヤ	▲	▲	■	■	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

「書かない」などの否定形

以下、各項とも本稿では三市を中心として見ていく。

洲本市はヘンで相生、赤穂などと同じ。敦賀、福井はヘンで岩美、鳥取および日生、備前と同じ、即ち、近畿型をヘン、中国型をソとすると敦賀、福井は中国型となる。敦賀、福井は近畿の東。鳥取、備前（岡山県）は近畿の西だから近畿のヘンの東西にソがあることになる。

また、洲本の女子にはカケヘンが多く、これは但馬線の和田山から竹野までのものと同形。さらに、カカンの形もかなりあるという点では相生、赤穂とは異なる。

同様に「着ない」とキレヘンがある点で但馬線の竹野までと同じ。キラ型（キラヘン、キラン）があることも同様のことがいえる。

「来ない」の洲本はケーヘンが多く、この辺りでは新しい形といわれるコーヘンも多くなっている。成人は新しいコーヘンではなく古い形とされるケーヘンである。

敦賀、福井はやはり西の鳥取と同じ形のものが多い。

「会う（会った）」の促音便、ウ音便

洲本は相生、赤穂と同じオータの形が本来のものであることは成人がそうになっていることからわかるが、甲南女子中学、女子大学もアッタが多いように若い人の間ではこの形がどんどん進出している。即ち、共通語化が進んでいるのである。その点、敦賀、福井も同様でアッタの方が率も多くなっている。

但馬線は本来のアータの地域であったことは成人層が各地点ともそうであることからわかる。

「起きられない」などの状況不可能形

今回の調査ではこの形のほかに「まだ幼くて書くことができない」の能力不可能の形も調べたが能力ではヨーカカン、エーカカンなどのヨー・エーがつくか、それをつけない別の形かなどであった。能力の方は本稿では省くことにする。

洲本の成人がそうになっているように古くからこの地ではオキレン、オキレヘンの形であったが、また、もう一つオキレヘンの形も古くからある。これは但馬に多い形で、この（表5）でも和田山から香住までに現れている。これはオキレルという可能動詞のオキレと、否定ヘンの上に可能レルをつけて不可能動詞レヘンを作り、オキレ

十レヘンとなったものである。

敦賀、福井は(表5)の通り鳥取と同じようである。

「赤くなる」と「明るくなる」

この語を調査したのは赤穂市で古くから両語ともアコーナルとなるので、「西の空がアコーナル」で同音衝突することがあるということからである。

洲本では特に成人層は男女各一名の調査であるが、「赤」も「明」もともにアカーナルとなっている。中学生にもアカーナルは両語にあるが、「赤」にはアコーナルはあるものの「明」にはアコーナルはない。

敦賀の成人女性性は両語ともアコーナルとなっている。

敦賀・福井には標準式のアカクナル、アカルクナルが中学生で多くなっていることが見られる。

「無くなる」

成人層では三市ともノーナルが多いが、中学生ではナクナルが八十パーセント以上。ただ、福井の成人女性がナクナルになっている。

なお、ナーナルなどア段をのばす言い方は但馬線に多く(会)アータ、(赤)アカーナル、(明)アカーナルが成人層に見られるようにこれが古い形である。

「書かせる」などの使用形

五段活用未然形に使役助動詞ス・サスをつける形とセル・サセルをつける形とが混在している。

洲本は今まで見てきたように、本来カカスであったものが、標準式のカカセルになってきたことが成人使用と中学生使用との関係から見られる。洲本の成人は相生、赤穂と同形のものが多いが中学生は成人とは異ったものを使うようになってきていることから右のようなことがいえる。

敦賀・福井もカカスからカカセルになったが、それが洲本よりも早くから行なわれたものかと思われる。敦賀の成人男性がカカスであり女性がカカセル。福井は成人男女ともカカセルになっている。より都会地の方が共通語化しやすいということがあるからである。

「来れば」などの仮定形

洲本はキタラ。敦賀・福井はキタラからクレバになったものと見られるが、敦賀よりも福井の方が共通語化が進んでいることは「書かせる」と同様である。

指定助動詞ダ・ジャ・ヤ

洲本の中学男子にジャがかなり見られる。淡路島は、山陽地区また四国の影響かともとジャが多いところである。

富山・石川はジャとヤの併用地域であるが、福井の中学女子は百パーセント、ヤになっている。

一般的にジャが古くヤが新しいと考えると若い女性が新しいことばを早くとり入れるということから中学生女子も同様でヤが多くなっている。ところが、洲本はヤだけを見ると男女同じだがその分、さらに、新しい共通語化のダになっているのだと思われる。

本稿を成すに当っては三市の教育委員会社会教育課と福井市立明道中学校・敦賀市立気比中学校・松陵中学校・洲本市立洲浜中学校にご協力頂いた。記して謝意を表す。

なお、調査時期は平成一年六月から十月である。

また、文法項目は各市町村教育委員会と各市町村の中学校で豊岡市立北中学校・鳥取市立東中学校・各市町教委・各中学校に謝意を表す。

この調査は昭和六〇年七月から六二年九月である。